Osaka University Knowledge Archive

Title	女子青年の「死」の概念 : 同一性の確立の視点からの検討
Author(s)	松山, 奏
Citation	大阪大学臨床老年行動学年報. 1997, 2, p. 82-88
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11527
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

女子青年の「死」の概念
～同一性の確立の視点からの検討～

松山　奏

はじめに

個人の持つ死の概念は様々な現実、非現実の死を体験しながら獲得されていくものである。又「死にたいする態度は個人にとってその人がどのように生きていくかを左右する重要な因子として働いている」「人は生きてきたように死ぬ」という言葉が示すように、個人の死の概念はその人の「生き方」とも深く関わってくることが考えられる。つまり、個人の死の概念は、「死」の対極にある「生」に対する個人の考え方、有りようを反映しているということになるのではないだろうか。

自分自身の生活や生き方、そして生涯をどのように感じ、認識し、概念化するかがその人の人生そのものにとって最大の課題の一つになる場合がある。一方で、自らの生き方について、何らかの人生観を持たないままその人生を送ることも可能である。しかし人生の最終段階に達するまで「受け身」的に個人の人生観が形成されていくのを待つ、ということでは取り返しのつかない問題に直面することもあるのではないだろうか。そしてその問題の一つとして「死」と「死をめぐる問題」が挙げられるのではないだろうか。

現代は医療技術の発展に伴い「死」の様式が変化しつつある時代である。死に至る病の告知、脳死判定、臓器移植や尊厳死の問題に対する是非が問われる中で、その時期その時期なりの、死の概念や死に対する態度というものを「主体的な生き方」という視点から個人が明確にしておく必要があるのではないかと考えられる。

そこで本研究は、青年期における若者の「死」の概念の内容を、ターミナルケア場面における“全人的”痛みの理解のモデル（柏木：1994）を用いて身体的・心理的・社会的・霊的（実存的）という視点から捉え、明らかにすること、また青年期は人生周期の中で「同一性対同一性拡散」という“主体性”や“存在証明”“自己価値”といった「主体的な生き方」に関わる問題に直面している。その青年の「死」の概念と、「自我同一性」の獲得の問題との関連性を検討することを目的とし、探索的な研究を行った。

Ⅰ．死の概念及び自我同一性研究について

1）死の概念

「死の概念」はいつ頃から形成され始めるのであろうか。子どもの死の概念についてのもっとも代表的な研究として、ハンガリーのNagy(1948)がある。この研究では文章、絵、面接によって死の概念を表現させたもので、研究の結果、まず第一段階、５歳以下の子どもは死を取り返しのつかないものとは受けとめておらず、死の中に生を見ていること、第二段階、５歳から９歳の子どもは死を擬人化することが多く、死を偶然の事件と考えること、第三段階で９歳以上になると子どもは死を大人と同じように自然法則により生起するものと考える傾向があるということが明らかにされている。またその後の研究において、それはピアジェの「生命の概念の発達」と同じ段階を追うこと「認知発達」の段階と比例

することも明らかにされている。このように「死の概念」は年齢や他の概念の認知、発達との関連において形成されていくものと考えられる。

近年の研究では、E.Tamm（1995)の描画による「死の概念」の質的な差を年齢と性別において調査したものが挙げられる。彼らは描画をもとに「死の概念」として３つのカテゴリー、すなわち(1)生物学上の死の概念（死体、戦争、肉体と魂の分離）(2)心理上の死の概念（嘆く人、不安、黒色）(3)形而上の死の概念（花畑、天国と地獄、十字架）を作成、それぞれを分類した。その結果、加齢に伴い「生物学上の死の概念」の描画は減少し、「形而上の死の概念」の描画が増加する傾向があること、また「心理上の死の概念」の描画は年齢に関係なく現れることを明らかにしている。また、男子は「生物学上の死の概念」の描画が多く、女子は「心理上の死の概念」の描画が多い。「形而上の死の概念」においては男女差がみられないという結果も挙げられている。

描画は、事物の再現的な表現であると同時に心理的気分や非視覚的な性質を表現するものとして様々な調査にも用いられてきている。本研究においては、「拡散的なイメージから中心的なイメージへの統合」を目的とした九分割統合絵画法（森谷：1983）を用いて青年の持つ「死」の概念を、イメージの流れに沿って多角的にとらえ、明らかにすることを試みた。

２）自我同一性の問題

「自我同一性」の概念はエリクソン自身の表現によれば「自我が確実な集団の中での未来に向かって有効な歩みを学ぶ途上にあるという確信」であるとされ（小此木：1973）すなわち現実的な自尊感情の発達そのものであることを示唆している。(遠藤：1981）また、(無藤：1994）によると、アイデンティティーの考え方として、『その人自身が過去からずっと連続して生きてきている存在としての「自分を感じる」』という側面と『社会の中で見られたり要請されたりしている自分が「自分を社会の中にどう位置づけるか」』という側面の両面があるが、特に、社会との新たな出会いのただ中にいる青年期は、自分がどう生きたいのか自分なりの道を見つけていく、自己を確立していく、精神的に独立、自立していくといった文脈で捉えられることが多いとしている。

青年期を迎えた人は個人特有の特徴、予想される将来の目標、自分自身の運命を統制する力に気づき、現在の自分が何であるか、将来何でありたいかを決めたいと思うようになる。つまり、自己のレベルでは「自分とは何ものであるのか」「どのように生きていきたいのか」という問題に対する価値観を統合しながら生きていくようになるのである。青年期以前の同一化が多くは遊戯的で一貫性を欠くのとは対照的に、青年期に形成される同一性は自覚的、現実的で一貫性と発展性を持つものと考えられている。つまりアイデンティティーが意識化された形でテーマにできるようになるのは思春期以降であり、それ以降死ぬまでの間形成され続けていくものなのである。

自我同一性の測定方法はエリクソンの記述をもとに作成された質問紙法や投影的な方法、ＳＤ法、面接法などがある。本研究においては（遠藤：1981）による自我同一性尺度を用いて「同一性対同一性拡散」の１９項目からなる質問紙を用いた。この尺度はエリクソンの著作から抽出された文章によって構成され、他の心理検査法や同一性測定法との相関も高いことが明らかにされている。(遠藤：1981）

Ⅱ．問題と目的　－“主体的な自己”の視点と「死」の概念－

「人は生きてきたように死ぬ」また「死」について学ぶことは「生」について学ぶことであるといわれている。このことは「生」と「死」が表裏一体の問題であり、個人の「生き方」や「価値観」が「死」に対する「考え方」や「死」の概念に相互に影響を及ぼすということでもあるだろう。同一性の重要な構成要素として「生き方」や「価値」の追求といった領域があることも明らかにされているが（加藤:1983）同一性の確立の中で自分の「生」に深い意味を見出すこと、その作業の一貫として「死」にまで思いをいたすということもあるのではないかと考えられる。つまり自分の「死（生)」について考えること、意識することが同一性の確立の過程にも影響を及ぼすことがあり得るのではないだろうか。

「概念」は我々が事象を理解したり、受容する上で基本となるものの「捉え方」・「考え方」である。そこで、どのような「死」の概念を持っているのかということを明らかにすることは個人がどのように死を理解し、受けとめているのか「死生観」を支える基本的な部分を明らかにすることであると考えられる。では日本人はどのような死生観を持っていると考えられているのだろうか。（梅原：1989）によれば、日本人は「人間が死んでも魂は存続し、しばらく「あの世」に行っているが、そのうちに再生する。生命は永遠に続くだろう」という“何となくの期待”に支えられて生きているのではないかとされている。それは「何となく」というあいまいな状態で平衡を保とうとする日本人の「自我」のあり方とも呼応している。しかし、近年日本も西洋の影響を強く受け「私」にこだわる人も増えてきたと考えられる。また、医療の進歩に伴い「私」という“主体的自己”の選択を迫られる機会も増えつつある。ゆえに自我同一性を意識し、確立しようとしている人ほど、その自我の終焉についても責任ある解答を見出さなければならないと考えるのではないだろうか。そこで本研究は、先にのべたように青年期における死の概念を“全人的”な視点から捉え、分類し、青年期の人が「死」をどのように概念化することによって理解しているのかを明らかにすること、またその「死」の概念を「自我同一性の確立」の視点から捉え、その関連性の検討を目的として探索的に行った。

Ⅲ．方法

1）死の概念の調査

九分割統合絵画法（森谷：1983）を用いて『「死」と聞いて連想することをセルの順番に絵で表現して下さい』という教示を行う。（その際、絵についての簡単な説明なども求める）

2）自我同一性得点の調査

自我同一性尺度（遠藤：1981）の「同一性対同一性拡散」の段階から選定された１９項目を使用した質問紙法。５件法による解答を求め、その合計得点を自我同一性確立の指標とする。

3）調査対象

大阪府下の保育系女子専門学校生を対象に「九分割統合絵画法」（1996年5月実施）
「質問紙：自我同一性尺度」（1996年9月実施）９３名の回答を得ることができた。

Ⅳ. 分析と結果

1）青年期における死の概念

9つのセルに順番に描かれた「死」の概念を（E.Tamm）の構造化されたカテゴリーを基に、柏木（1994）の“全人的痛みのモデル”と照らしあわせ「身体的」「心理的」「社会的」「霊的」の4つの上位カテゴリーとそれを構成する3つずつ、計12の下位カテゴリーを作成し、分類を行った。（表1・表2）これらの結果、青年期における「死」の概念は（表2）からも明らかなように「霊的な死の概念」に分類される内容が最も多いという結果を得られた。

セルの順番に現れる死の概念を見ると、第1セルには「心理的に捉えた死の概念」が最も多く、最後の第9セルには「霊的に捉えた死の概念」の描画が多い。（図1）また「身体的な死の概念」「心理的な死の概念」に分類される内容はセルが進むに連れ減少していくが、「霊的な死の概念」に分類される内容はセルが進むに連れ増加している。

最も多い内容であった「霊的な死の概念」に分類される描画の中では<死後の世界>の内容を表す描画が最も多いが、セルの順番に見ると<死後の世界>の描画はセルが進むに連れ減少していくが<実存的・死の意義><死後への願望>という内容を示す描画はセルが進むに連れ増加していき、最後の第9セルでは<実存的・死後の意義>という内容を表す描画が最も多いという結果が得られた。（図2）

表1　カテゴリーの分類

身体的		
肉体の死・死の状態	疾患・医療場面	最期の時間
死体 自殺 事故 戦争 血・骨	病院 救急車 医師 看護婦 心電図	肉体と魂の分離 臨終 闇に吸い込まれる 止まった時間
心理的		
悲しみ	精神的な状態	精神的なイメージ
嘆く人 涙 ハンカチ 泣く	不安 恐怖 落ける 孤独 混乱	黒色 灰色 雨降り 闇 破裂
社会的		
儀式	思い出	社会との別離
お通夜 お葬式 火葬場 骨壺 菊の花	アルバム 亡くなった家族 死んだペット 遺影	遺書 遺骨 学校の空席 お墓
霊的		
死後の世界	実存意義	死の時・死後の願望
花畑 三途の川 死神 天国・地獄 金色の世界	輪廻 転生 最期の一瞬 自然界のサイクル 存在の消失	見守る 死後の再会 新しい出発 皆に見守られて 家族と共にいる

表2　カテゴリー内容の描画数

上位カテゴリー	セル（数）	下位カテゴリー	セル（数）
身体的	116	肉体の死	70
		疾患・科学の死	29
		終わりの時	17
心理的	142	悲しみ	62
		精神的な状態	28
		精神的なイメージ	52
社会的	203	儀式	97
		別離	53
		社会的な関わり	53
霊的	292	死後の世界	198
		実存的・死の意義	57
		死後への願望	37

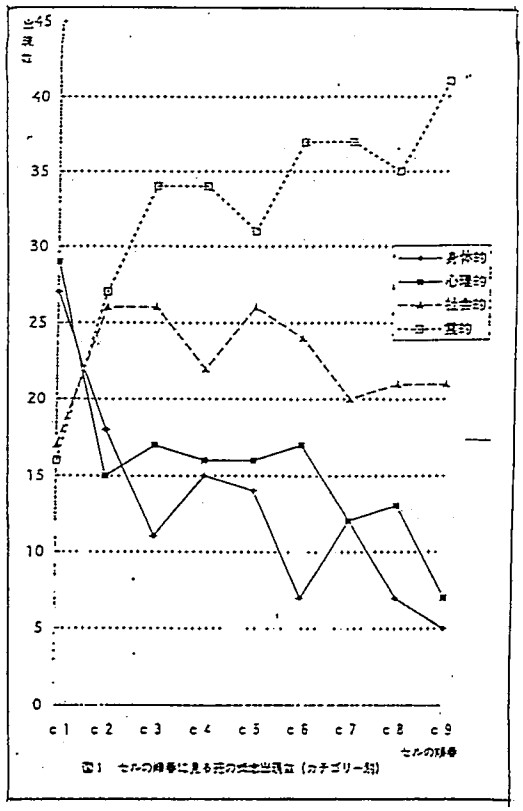

図1 セルの順番に見る死の概念出現数（カテゴリー別）

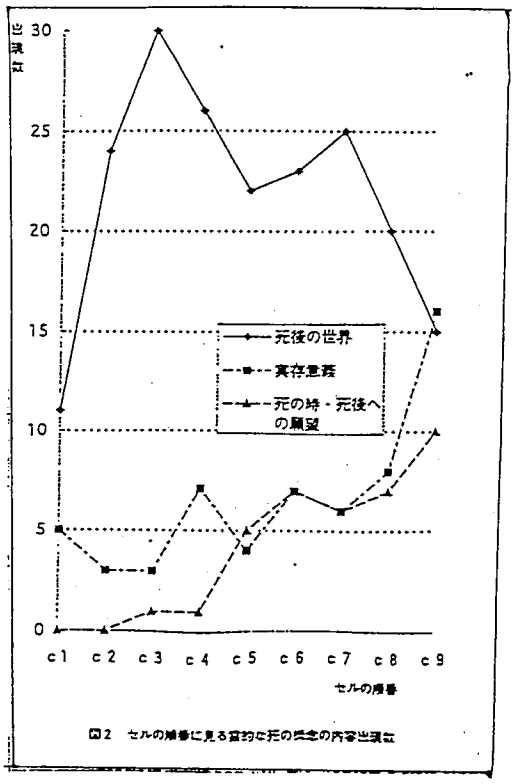

図2 セルの順番に見る霊的な死の概念の内容出現数

2）自我同一性尺度と死の概念の内容との関連

自我同一性得点は、平均得点60.59、ＳＤ7.25という結果が得られた。女子の平均得点は60.75、ＳＤ8.15という遠藤(1981)の研究結果からみても、ほぼ平均的な同一性得点を対象者から得ることができたと考えられる。しかし、得点高群と低群の分類による描画の内容との間に関連を見出すことはできなかった。

同一性尺度の構成因子と、描画の内容における関連をみるために「自我同一性尺度」の１９項目を主因子分析し、因子負荷量が０．４以上の項目に注目し、第一因子として「自己信頼感」、第２因子として「目標の設定」を抽出した。その因子を含む項目群をSCALE１とSCALE２とし、それぞれの項目の得点の合計を用いて高群と低群に分類し、検討を行った。その結果「霊的な死の概念」のカテゴリーの中でも＜実存的・死の意義＞＜死後への願望＞の内容を示す描画は、「自己信頼感」因子（SCALE１）と「目標の設定」因子（SCALE２）の両因子の項目の得点が高い人において出現頻度が高くなり、反対に両因子の項目の得点が低い人においては出現頻度も低いという結果が得られた。

Ｖ．考察

描画を通して得られた結果から、青年期における死の中心的な概念は、「霊的」もしくは「形而上的」な概念に分類される内容であることが示唆された。このことは「死の概念」の発達的研究における結果とも重なるものである。本研究において使用した「九分割統合絵画法」の特徴である“セルの順番”（イメージの流れ）に着目すると「身体的」「心理的」

「社会的」な意味における死の概念といった“全人的”な視点から死の概念をイメージし、その統合された形として「霊的」な死の概念があることが考えられる。

また特定の宗教観に支えられているものではない<死後の世界><死後への願望>という内容を表す描画が多いことは梅原（1989）が指摘しているように「死後も生命が永続するであろう」という“なんとなく”の期待を持つ死生観の現れであるとも考えられる。

「死」を多角的に捉えることは「死」を理解し、受容していく上で大切なことである。現代では「人間の死」について、科学的な知識は多くの人が持ち、そのことは描画の内容からも明らかなことである。しかしながら、そういった“科学の知”は「私の死」とは別のものである。なぜなら「科学」はそれを研究する人間が自己を対象とする現象から切り離して研究するところに特徴があるからである。この“科学の知”に「私」という“主体的な存在”という視点から意味付けした“知”を持つことが「死」と「死をめぐる問題」に直面していく中で必要なのではないだろうか。今回の研究で分類された青年期の「死」の概念の多くは<死後の世界>を表す描画であったが、この内容は既に述べたように特定の宗教に頼るものではなく“死後の生命”が存続する場所としてのイメージである。つまり、現実的な（科学的な）「死」に対する知識と宗教性のあるイメージを併存させた「死」の概念を持ち、死生観の基盤となっていることが示唆されたと考えられる。

「自我同一性」の視点による「死」の概念の検討では「霊的な死の概念」の中の<実存的・死の意義><死後への願望>といった自己の「生き方」と結びつきがあると考えられる内容と「自我同一性」を構成する2因子と関連の可能性があることが考えられる。このことは<実存・死の意義><死後への願望>といった死の概念が「私」という視点から捉えている内容であるということが考えられる。つまり「私の生」の終焉として捉える「死」の意識は「自己信頼感」・「目標の設定」の確立に何らかの影響を与えることもあると考えることができる。

VI. 討論

以上のことから、青年期の人が「死」をどのように概念化することによって理解しているのか、またその「死」の概念と「自我同一性」の確立との関連について一つの考え方が得られた。もちろん人は「死」を目標にして生きているわけではない。アイデンティティー形成に「死」に対する“主体的な自己”としての考えを持つことが何らかの影響を与えるのは「自分というもの」を感じながら「自己を実現していく」ということの一つの側面として理解できる。現代は、世界的規模で価値観の変動が起こっている時代であり、アイデンティティーにとって重要な「ジェンダーアイデンティティー」や「成人の自己実現のあり方」や「社会や家庭で果たす役割」が多様化し明確でなくなっている。さらに老年期のあり方をはじめとして、ガンやエイズなど死をめぐる問題が多くの関心をひいており、どのような質の生をいかに生きるかという問題が注目される頻度も格段に高くなってきている（無藤:1994）ということにも関連するであろう。

「死をめぐる問題」についての判断が問われる現在、“科学の知”はますます進歩していくのに対し、「自分自身」の問題であるという意識が希薄であることは、どのような影響をもつであろうか。今後、どのような死生観を持って生きるのかということが大きな課題となっていくと考えられるが、その際“科学の知”だけではなく、「主体的」な自分という

存在も意識した死生観を培っていくことが重要なのではないだろうか。

また「死をめぐる問題」に対しては「自分と関わりのある他者（家族）」という視点から考えることも必要とされる。人との関係の中で「自分というもの」を感じながら、自他両方が活かされる形で成長促進するという「人とつながりつつの自己実現」がアイデンティティーの現状に即した捉えなおしであるという考え方（無藤：1994）もあるが、「既存の価値観」の変動、「科学の進歩」といった時代背景における「死」の問題においてもこの視点が必要であることは非常に興味深いことである。

今後の課題として、死生観を支える「死の概念」の更なる研究、そして実際的な「死をめぐる問題」に対する考え方と「死の概念」の関連についての研究が必要と思われる。それらの研究を通じて、現代人における「死」の問題を明らかにしていくこと、そしてその問題が日本におけるデス・エデュケーションの役割について示唆するところを検討していくことが必要であると思われる。

【引用・参考文献】

柏木哲夫　1994　ターミナルケアにおけるチーム医療　心身医療6,11　53-58
仲村照子　1994　子どもの死の概念　発達心理学研究　5,1,　61-71
Nagy, M 1948 The child's theories concerning death. Journal of Genetic Psychology, 73, 3-27
Maare E. Tamm Anna Granqvist 1995 The meaning of death for children and adolescents:A phenomenographic study of drawings. Death Studies, 19:203-222
森谷寛之　1983　「子どものアートセラピー」金剛出版
小此木啓吾訳　1973「自我同一性」誠信書房
遠藤辰夫　1981　「アイデンティティーの心理学」ナカニシヤ出版
無藤清子　1994　青年期とアイデンティティー『こころの科学』－53アイデンティティー47-51　日本評論社
加藤厚　1983　大学生における同一性の諸相とその構造　教育心理学研究　31,4 292-302.
梅原猛　1989　「日本人の＜あの世＞観」　中央公論社
河合隼雄　柳田邦男編　1997　「現代日本文化論 6　死の変容」岩波書店
多田富雄　河合隼雄編　1991　「生と死の様式－脳死時代を迎える日本人の死生観」誠信書房